秘術の記憶

藍須華江希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

秘術の記憶

【Nコード】

N8348I

【作者名】

藍須華江希

【あらすじ】

記憶に秘術が宿っていた女の子。

女の子は夢を見た。自分の記憶と会話をしている夢。

目が覚めると記憶をなくししていて、しかも知らない家にいた。

二人の女の子とであった。

三人は、記憶をなくした子と一緒に秘術……記憶を探す。

記憶を見つけたとき

。

？

此処はどこ……？

「こんにちは。」

貴方は誰？

「私は貴方ですよ。」

私……？

「正確には貴方の記憶。」

だから私の記憶がないのか。

「はい。」

でもなんで私の記憶が私の前に現れるの？

「貴方の記憶……いや、私はとある秘術の元です。」

秘術……？

「はい。これを手にいれると……」

え？何？何て言ってるの？視界がかすんで来た……。

？

「大丈夫かなあ……コイツ。」

誰かの声が聞こえる。

「多分大丈夫だと思っけど……。」

目を開けてみた。天井が見えた。どうやら私はベッドの上に居るみたい。

「あ、起きた？」

片目を隠している金髪の男の子？が目に入った。私の顔を覗き込んでいる。

「此処はどこ？」

「此処？此処は俺たちの部屋。お前、家の前で倒れてたぞ……？」
ベッドの近くの椅子に座った。すると、ポニーテールの茶髪、茶色と黒のオッドアイの女の子？が近くに来た。

「大丈夫？無理しないでね。あ、名前はなんていうの？ウチは伊波

佐奈。」

「わからない……。」

二人とも顔を合わせて、記憶喪失？っていつている。私は、うん、と答えた。

「そっか。あ、俺はファナ・ミーチェ。ハーフだ。」

そう言つて、ファナ君はどこかにいった。佐奈ちゃんが代わりに椅子に座つた。

「ファナはご飯を作りに行つたよ。」

「そうなの？ファナ君つて料理できるの？」

いきなり、佐奈ちゃんが笑い出した。私がムツとしていると、ゴメンゴメンと言つて、笑うのを止めた。

「ファナは女だよ？まあ、間違えるのも無理ないね。」

「ええ！？ファナ君つて女の子だったの？」

私はすごい吃驚した。それを見て、また佐奈ちゃんは笑い出した。

「うん。そろそろご飯できると思うから、後でいろいろ話そうか。」
言い終わると同時にドアが開いた。料理を持っているのはピンクのエプロンをした、ファナく……。ファナちゃん。

どうぞといわれて私もご飯を食べた。このときはまだ幸せな方だった……。これからこの三人でとても大きい事件を起こすことになる
うとは……。

？

とりあえず、こいつの名前を決めるか。」

私を指差してファナが言った。(呼び捨てにしるといわれた。) 佐奈が頷いた。

「もしかして、私と同じ和国？黒髪に、黒い目をしているし。」

和国……。海に囲まれた島国。文化は結構変だって聞いた事があるな……。

出身国も思い出せない……。

「出身国もわからないや。」

「じゃあ、和国の名前がいいな！」

「う、うん。」

二人は頭をかしげた。私の名前を考えてくれるみたい……。しばらくたつと、ファナが立ち上がった。

「黒霧！霧がある日に拾ったし、黒髪だから！」

黒霧……。

「ファナにしてはいい名前じゃん。」

「私、黒霧がいい！」

此処に来て、初めて大声を出した。二人とも吃驚している。

黒霧……聞いたとき何かが私の頭に入った。この名前でないといけないと、聞こえたような気がした。

「じゃあ黒霧、食事中に話していた夢を詳しく話してもらおうか。」
食事中、記憶を失くす前の夢の話を少しした。

私は、詳しく夢のことを話した。【秘術】と言うと、二人ともおびえたような顔をした。なんだろうと思って話を止めると、気にしなくていいといわれた。

そして、全てを話し終えた。

「つまり黒霧の記憶は、記憶自身の意思で黒霧から離れたってこと？」

フアナが首をかしげながら聞いた。

「そうじゃないの？」

佐奈が答えた。

私は、秘術のことについて何か知っていないか聞いてみることにした。そしたら、二人とも……いや、この国にいる人全員知っていると答えてくれた。詳しい話しを聞こうとしたが、そのことについては知らないらしい。話すことを法律で禁止されているみたい。それでも何とかならないかと聞いてみたら、国に許可を貰えば話してくれるみたい。でも、今まで許可を貰った人はいないらしい。

「そうなんだ……。私、許可を貰いに行つて来る！」

そういつた瞬間二人が立ち上がった、

「駄目！」

と言った。理由を聞くと、この国にスパイが入国したと警告があつて、しばらく外に出れないみたい。

「え、じゃあ私はどうなるの？」

「んー、警戒する前だったから平気じゃね？お前、まる三日寝ていたんだ。お前を拾つてすぐに警報が鳴ったけどな。」

言い終わった瞬間ドアが荒々しく開けられた。ドアの方を見ると国のお偉いさんらしき人が入ってきた。周りには武器を持った兵士。

「伊波佐奈、フアナ・ミーチェ貴様等をスパイを匿った容疑で逮捕する。その女！こつちに来い。」

これから私はどうなるの？

？

「待てよ！黒霧は秘術の記憶を持つ者だ！手荒な真似をすると、また地獄を見るぞ！」

俺は言つてやった。兵士達は俺らを放し、国のトップ……ウイナ・ミカラは黒霧を放した。黒霧は何が何だか解っていないらしい。

「な、何？それは真か！ファナ・ミーチェ！」
「本当だ。」

ざわめき始め、黒霧は俺たちの元へ来た。どうしたの？と聞いてくるが佐奈が後で話すといった。

「秘術の事を話してもらいたのだけど……。」

「ああ、話してやるさ。図書館も開放しよう。」

佐奈が言い終わる前にウイナが言った。ウイナの態度が明らかに違う。

図書館……。秘術の事が書いてある本がいっぱいある。そこに入れるのは、許可を貰ったの者のみ。それ以外の人はどんな理由でも入る事はできない。仮に入つたとしても、射殺されるだけだ。

「明日の10時に図書館で待つてくれ。」

「わかつたわ。」

そういい、ウイナたちは帰つてつた。

「ねえ、秘術つてそんなに怖いものなの？」

黒霧は俺よりも身長が低い。俺の袖を掴んで聞いてきた。普通に言つたら俺が悪者みたいになつてしまう……。さて、どうしたものかな。

と、佐奈が助け舟を出してくれた。

「黒霧、明日全部わかるから、それまで我慢しよう？ウチ等もそんなに知らないんだ。」

黒霧は俺から離れた。

いきなり腹がなる音がした。俺だ。時計を見ると8時になっていた。

「ご飯食べようかと佐奈が言い、俺と黒霧は飯を待った。しばらくして佐奈が飯を待ってきた。俺たちはそれを食い、さっさと寝た。飯を食っているときに警戒が解除された。

朝、俺が飯を作る当番だから台所に向かった。そしたら黒霧がいた。いい匂いもしている。どうやら飯を作ってくれたみたい。黒霧はおろろしているが俺がありがとうと言ったら落ち着いた。そして一緒にテーブルに料理を並べた。佐奈が起きてきて、飯をくつた。それから着替えて、外に出た。人がいっぱいいる。久々に外に出れるからな。

俺等は図書館に向かった。図書館の前には兵士とウイナが居た。

「さあ、これを腕につけてくれ。外したら殺されると思え。」
許可証見たいな物を腕につけた。ウイナに案内されながら図書館に入った。

？

？

図書館を外から見ると塔なの。中に入るととても高い本棚があり、びっしり本があった。

「此処はただの本だ。秘術の本はこっちだ。」
「そういい、大きな封印されたドアへと向かった。」

ウイナ国長は呪文を唱えながら封印紙を剥がしていった。剥がし終わるとドアが開いた。中を見ると大きめのテーブルがあった。その上には透明なケース。

ウチ等はテーブルに向かって歩いていった。透明なケースは、結界だった。四隅に呪文が書いてある紙があった。中は分厚い本が一冊。「この結界は秘術の記憶を持つものにしか解けない。黒霧と言った。解いてみる。」

結界を指差しながら黒霧に言った。

「待てよ！黒霧は記憶がないんだ！」
「フアナがウイナ国長に言った。国長は記憶がなくても解けるといった。」

黒霧がおずおずと結界に手を出した。すると、勝手に結界が解けていった。

「さあ、この本には秘術のことがある。外国語でしかも古代文で書いてあるが、読めるものはいるか？」

国長が一ページ目を開いた。

これは、漢字？じゃあ、華国の言葉？

そんなことを考えていると、黒霧が読み始めた。

『秘術とは全ての力』

フアナが全部読んでくれと黒霧に言った。黒霧は頷いて続きを読んだ。

『秘術を手に要れた者。これ即ち世界を滅ぼす力を手に要れた者。記憶を持つもの。これ即ち力を封印する者。』

つまり、黒霧は秘術を封印する者と言うことね。

『しかし、一歩間違えれば秘術を手に要れた者よりも大きな力を要することになる。ただし器が壊れなければ……。』

器……身体のこと？

黒霧が止まった。怖がっている。

「大丈夫？ウチ等は読めないの、最後まで読んでほしい。辛いと思うけどお願い。」

ウチはそう言った。黒霧は頷いて口を開いた。

『秘術を使用すると、使用者の周りに黒い霧が現れる。この霧は使用者の意思によって物に変えられる。どんなに大きいものでも

。秘術を手に要れた者や記憶を持つものが死んでしまうと秘術は暴走し、世界を壊す。』

番外編（前書き）

これは、本編と全く関係ないです。読まなくても大丈夫です。

番外編

黒「皆さん、明けましておめでとう御座います。一応主人公の黒霧です。」

フ「あけおめ！準主人公のフアナだ！」

佐「同じく佐奈だよ。でも、今日だよ？」

フ「それは、これを書いた藍須華江希つー馬鹿が鹿島神宮？だっけな。まあ、そこに剣道のなんとたらか　んたらで初詣（ついでに稽古）しに行つたんだよ。」

黒「結構楽しかったらしいよ。」

佐「ふーん。で、うち達は何をすればいいの？」

フ「なんか、新年の挨拶だよ。」

黒「これが私達の生みの親？」

佐「最悪かも。」

黒「さ、始めましょうか。」

カンペ『今年にしたいこと』

フ「あ、お題だ。」

黒「用意がいわね。」

佐「藍須華江希はこの小説を完結だつて。そんなの無理でしょ。」

フ「人気ないしね。今？だっけ？その続きがかけないらしいよ。」

黒（馬鹿じゃないの）「私は記憶を取り戻すこと！」

佐（今、黒霧の心の声が……）「その手伝いかな。」

フ「とにかく元気に過ごす！」

藍「どうも。藍須華江希です。」

三人「……何故ここに！？」

藍「ま、そこは置いといて。あけましておめでとう御座います。私は佐奈にそっくりの性格をしています。なるべく小説を早く書けるようにしたいんですが、文才が無くて無理です。すみません。」

カンペ『今年の運勢!』

フ「あ、箱ごとおみくじが。これを引けってか？」

黒「そうだね。よし、私はこれ。」

佐「じゃあ、うちはこれ。」

三人「……」

フ「よっしゃ!大吉!」

佐「うちも。黒霧は？」

黒「大凶……」

佐、フ「ドンマイ」

佐「ちなみに華江希は吉らしいよ。」

カンペ『最後に一言!』

黒「えっと、藍須が居なくなっただので私達が。」

フ「気まぐれ魔人め。」

佐「あはは。えっと、

『更新は亀以上に遅いと思いますが、よろしく願いします。ですって。』

黒「ホントに一言ね。」

フ「まあいいんじゃない。馬鹿だし。」

佐「そうね。じゃ、最後は一緒に……」

三人「……これからもよろしく願いします!」「」「」

？（前書き）

一応完結です。

？

「世界を……」

私が死ねば世界が壊れる……か。だから怖がってたのね。

以外に私は落ち着いていられた。だけど、三人は青い顔をしている。

「な、なあ黒霧、本当か？本当にそう書いてるのか？」

私が頷くと余計に青くした。

「え？知らなかったの？」

佐奈は知っていたみたい。

「え？いや、知ってたけど本当かどうか疑ってたからな……。」

下を向いた。沈黙が流れ重い空気が流れた。

沈黙を破ったのは私だった。

「大丈夫だよ！いま、記憶はないから！」

二人は安心したのか笑顔になった。でも、ウイナ国長は、

「いや、記憶がないほうが危ない。秘術が暴走する。」

また沈黙になった。

早く探さないと……！私はすぐに図書館を出た。

「おい！どこに行く！」

フアナが追いかけてきた。私は足が遅かったらしくすぐつかまった。

「探すの！記憶を！このままじゃ危ないよ！」

佐奈が来て、私を怒った。

「国の外は危ない！それに、一人で突っ走るな！まだ会ったばかり

だけど、ウチ達がいる！」

つまり、着いて来てくれると言っている。でも、私は断った。

するとフアナが、

「ふうん。じゃあすぐに死んでこの国を滅ぼすのかよ？そっちのほ

うが迷惑だ。」

言い返す言葉がない。黙っていると佐奈がじゃあ一緒に行こうとい
った。断りたかったけど、死んでしまったほうが悪いと思った。

「では、われわれも協力しよう。資金、食料などは出す。兵は国を守るので精一杯だ。準備が出来たら城まで来い。」

「ありがとうございます。」

私達はいったん家に帰った。

二人に魔法を教えてもらったり、魔物のことを教わったりいろいろなことを教わった。戦い方も教わった。

三日ほどたち、お城に行くとかかなりの資金と食料などを貰った。

国長が言うには、私と秘術は惹かれあうから私の行きたい所に在るかもしれないといってくれた。

さあ、準備は出来た。まず、どこに行こうかな？

？（後書き）

かなり中途半端ですが終わりにします。

続きはめんどゴホン、ゴホン。内容が浮かばないので書きません。

……気が向いたら書きます。

とりあえず、ここまで読んでくださった方ありがとうございました。

変な終わり方をしてしまいすみません。無駄文ですすみません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8348i/>

秘術の記憶

2010年10月9日11時18分発行